

もくじ 綾瀬・吉田家文書の紹介⑤ … P1 行政文書に見る足立区の水害記録 (十四) … P2 文化遺産調査案内① 洒井抱一と中村芳中 … P4

# 足立史談

## 第 627 号

2020 年 5 月 15 日

足立区立郷土博物館内

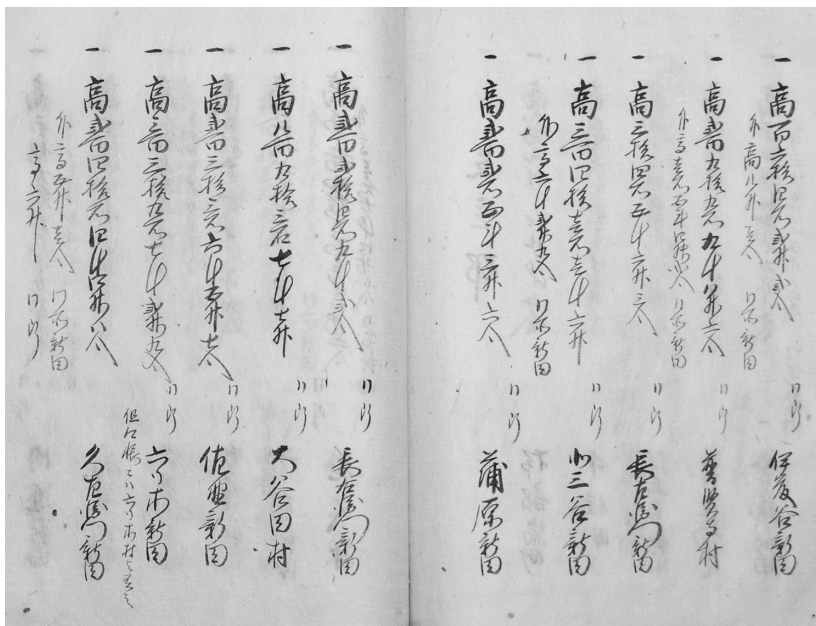
足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562



綾瀬・吉田家文書の紹介⑤ 元禄検地帳 (3)  
となりあう二つの村の石高について  
多田 文夫

元禄八(一六九五)年に調査された耕地や屋敷の状況は、元禄十(一六九七)年に検地帳としてまとめられ交付された。吉田家文書の伊藤谷新田と普賢寺村の検地帳からは、それぞれの村の経済の概要も見ることが出来る。

■両村の概要 村(新田)の石高と田畑の比率は次のとおりである。

- ・伊藤谷新田 一六四石余
- 田 九八石 (60%) 畑 六五石 (40%)
- ・普賢寺村 二九九石余
- 田 二一九石 (73%) 畑 八〇石 (27%)

両村ともに水田中心の村で、石高に換算する畑、屋敷のほか、藪、林、萱野、芝野が確認できる。

反当たりの公定收穫高を示す斗代(反×斗代=高を算出)が両村で次のように異なる。例えば等級が良い上田(じょうでん)だが、伊藤谷新田は9斗、普賢寺村は1斗多い1石になる。

等級	伊藤谷新田	普賢寺村
上田	9斗	1石
中田	7斗	8斗
下田	5斗	6斗
下々田	3斗	4斗
上畑	7斗	8斗
中畑	5斗	6斗
下畑	3斗	4斗
下々畑	1斗	(なし)
屋敷	7斗	8斗

元禄検地帳 (吉田家文書) に記された伊藤谷新田と普賢寺村の土地利用

No.	項目	伊藤谷新田	普賢寺村
1	田	石高 98 石 2 斗 4 升 6 合 面積 17 町 4 反 9 畝 18 步	石高 219 石 6 斗 6 升 5 合 面積 32 町 2 反 3 畝 5 步
2	畑・屋敷	石高 65 石 7 斗 7 升 6 合 面積 15 町 6 反 6 畝 16 步	石高 80 石 3 斗 2 升 1 合 面積 15 町 4 反 7 畝 5 步
3	計	石高 164 石 0 斗 2 升 2 合 33 町 6 反 1 畝 04 步	石高 299 石 9 斗 8 升 6 合 47 町 7 反 0 畝 5 步
4	屋敷地	屋敷 37、寺 1、蔵屋敷 1	屋敷 31、寺 1、蔵屋敷 1
5	藪	26 か所 1 反 9 畝 9 步	16 か所 1 反 5 畝 25 步
6	林	5 か所 3 畝 6 步	15 か所 9 畝 25 步
7	萱野	(記載なし)	9 か所 1 反 20 步
8	芝野	3 か所 3 畝 4 步	3 か所 1 畝 26 步

伊藤谷新田と普賢寺村という隣同士の村で、土地の生産力に違いがあるとは考えにくいので、村の位置づけが異なっていると考えるのが妥当だろう。

■新田と村 近世後期に地名となつてしまふのが「新田」と「村」という名称であるが、近世前期には明確な違いがあったとされている。足立区域では伊藤谷新田のほか、嘉兵衛新田、小右衛門新田など開発人の名を

元禄郷帳の写本 元禄検地帳は元禄十(一六九七)年に成立。結果を反映したのが全国の村々の台帳、「元禄郷帳」で、現在は独立行政法人国立公文書館に所蔵されています(「武蔵国郷帳」下)。右の写真は写本で、右側に伊藤谷新田と普賢寺村が記載された部分です。(当館蔵)

冠した新田が多い。千住の掃部新田（のちの千住掃部宿）も、開発人の石出掃部介吉胤の官途名、掃部介から名前をとっている。この新田の意味するところは新開発の村である。もちろん地名を冠した大谷田新田や蒲原新田もあり、普賢寺村も慶長十九（一六一四）年の開発定書では普賢寺新田として登場する。地名としての村と新田の違いの他は様々な租税の免除があったことが一部で確認されていたが、具体的な様相は資料が見つからず見えにくかった。

■斗代から見える「優遇」 幸い、今回の二つの地域は隣接しているため「新田」と「村」の差異を見出しやすい。石高はその典型で伊藤谷新田は斗代が低く設定し優遇されている（年貢高が少ない）。この算出された石高だが千住宿の助郷役（人馬の提供負担）や用水・治水施設の維持など様々な負担金算出と連動しているので影響は大きい。

ちなみに本百姓と考えられる屋敷持ちは伊藤谷新田が三七軒、普賢寺村が三一軒で、伊藤谷新田の方が多く、単純に考えても労働力は伊藤谷新田の方が勝っているのだろう。

しかし石高は普賢寺村の方が多い。もちろん幕府は基本的に年貢収納率を上げようとしているから、こうした優遇措置には、その要因があると考えられるが、その直接の要因は明

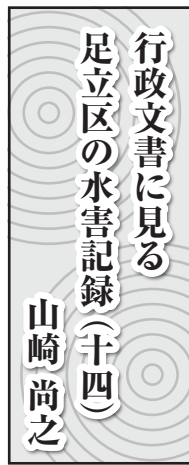
記されていない。

推定せざるを得ないが、検地施行の一〇〜二〇年ほどの延宝年間（二六八〇年前後）に行われた綾瀬川の新流路開作の影響が大きいのではないだろうか。

伊藤谷新田は綾瀬川で東西に二分され、用水路などにも影響があったと思しい。綾瀬川の新流路で二分された村として、嘉兵衛新田、五兵衛新田、そして伊藤谷新田があるが、いずれも元禄期に「村」へ移行しなかった。

こうした措置から伊藤谷新田も村という位置づけを行わずにおかれ、普賢寺村との差異が発生したと推定している。

つづく  
（郷土博物館学芸員）



■日誌【八】（明治四十三年水害）

八月十六日は雨だったようです。この日も救助活動や議員の救助状況視察などが続きます。八時十五分に郡職員、東京府職員、農会技手が綾瀬村へ救助米のことで出張しました。九時十五分に東京府の職員が来庁しました。

十時三十分、京橋区南金六町の宇都宮回漕店の店員が救助食料品の寄贈の件で来庁しました。

十一時四十分、花畑村の職員が来庁し、白米二百二十俵を供給してほしいと申し出たので、本日はとりあえず七十俵を（綾瀬村へ引き渡す百俵を融通して）提供し、明日さらに百五十俵を提供する予定としました。

正午に綾瀬村に出張して来た三名が帰ってきました。

零時五十分、東京府会議員の富岡彦太郎氏が来庁しました。富岡氏は明治二十七年と明治三十五年、千住町長を務めた人物です。

二時に郡長は江北村と西新井村へ出張しました。同時刻に東京府職員も同じ二か村へ出張しました。同じく同時刻に、芝区二本榎町（現在の港区高輪一〜三丁目あたり）の総代が罹災民への救助のことでやってきました。

三時三十分、罹災民救助のことで森久保作蔵（一八五五〜一九二六）現在の東京都日野市出身。初め自由民権運動に参加し、三多摩自由党壮士として活動。のち東京府会議員を経て、この時は衆議院議員の代理人が来庁しました。



繪葉書「勅使日野西侍從ノ慰問」 都立中央図書館所蔵  
人力車に乗って浸水のなかを視察に向かう侍従一行

四時にやまと新聞の記者が来庁しました。

■舟の貸与

四時十分、千住町の鈴木熊次郎氏が船舶一艘の借入のことでやってきました。地域全体が浸水している状況では、船は交通手段として必要不可欠なものなので、住民からの借用希望が多数あがっていました。『東京朝日新聞』八月十七日条には、南千住の様子として、「役場には小舟が五六艘遊んで居るのに、その一艘すら我々罹災民に貸与せぬは怪しからぬ」という不満の声が載せら

れています。この時期、小舟は払底している状況だったようです。そのためいろいろな代用品で作った舟(筏)、たとえば、ビヤ樽や竹、箱、角材、大桶、戸板、酒樽を結んだものなどが使われたと伝えていきます。

四時四十分には二六新聞社員の本吉豊次郎氏が来庁し、義援金百七十五円を寄贈しました。

九時に江北村と西新井村に出張していた郡長たちが帰ってきました。

六時に千住中組の鈴木三次郎氏が小船一艘を曳いてきたので借り上げました。

■死者の発生

西新井村大字本木の男性(四十二歳)が、十二日午前中に行方不明になっていましたが、十五日に溺死体で発見されたとの報告が郡長巡視中にありました。四十三年の水害では、東京府内で四十五人の死者と七人の行方不明者が発生しました。損害家屋は、東京府内で約二万七千戸、床上浸水約十三万戸、浸水面積二百一平方キロメートル(足立区の約四倍の面積)と、損害家屋等の規模は後年の台風被害と比較して大きいのですが、亡くなった人数は被害規模に比較すると少数でした。

■侍従の差遣通知

夜十二時に日野西侍従(明治天皇侍従日野西資博、後に子爵 一八七〇〜一九四二)が差遣されると東京

府より電報がありました。この水害地視察は十七日から十九日に行われ、南足立郡には十八日に来て千住の千寿小学校と千寿第二小学校の救護所を訪れる予定と、『東京日日新聞』八月十七日条に報じられました。明治四十三年の水害は大災害であったため、当時の先端的な広報メディアである絵葉書でも様々な画像が発行されましたが、その中に日野西侍従の視察の様子が印刷されたものもいくつか存在します。天皇の側近くに仕える「高貴」な人物が水害被災地を視察する様子は、絵葉書の対象にもなる珍しいものとして好きな眼差しでとらえられていたのでしょうか。

(当館専門員)

文化遺産調査案内①  
人物 酒井抱一と中村芳中

江戸後期から明治、大正にかけて足立には大農家、商家が繁栄し、多くの素封家(富裕層)が登場しました。谷文晁門人絵師を生んだ上沼田村(現江北地域の一部)の大農家船津家をはじめ、千住宿(現千住地域)で俳諧師であった接骨医名倉家、千住の琳派絵師を支えた薬問屋若田家など数多くの家が知られています。郷土博物館では、そういった名家の

伝えた数々の美術、文化の遺産を調査研究し、所蔵者のご協力とご理解を得ながら文化遺産調査特別展として公開しています。

こうした調査研究の成果や背景について本号から人物や地理などの切り口で、ご紹介してまいります。

1 江戸の絵師たち

(1) 江戸琳派の祖 酒井抱一

これまで足立とは一時的な関係と思われていた江戸の絵師や文人たちとの関わりが、調査の結果、日常的な交流であったことがわかり、門人たちも足立で活躍し、多くの作品が伝来している様子が見えてきました。

■抱一と交流 江戸琳派の祖、酒井抱一(さかいほういつ。一七六一〜一八二八)。

実名は酒井

忠因(ただなお)といい姫路藩主の酒井忠以(ただぎね)の実弟という上級武士です。出家して江戸市中に庵をかまえ実家の酒井家から支援を受け

ながら江戸の文人文化に隆盛をもたらしました。

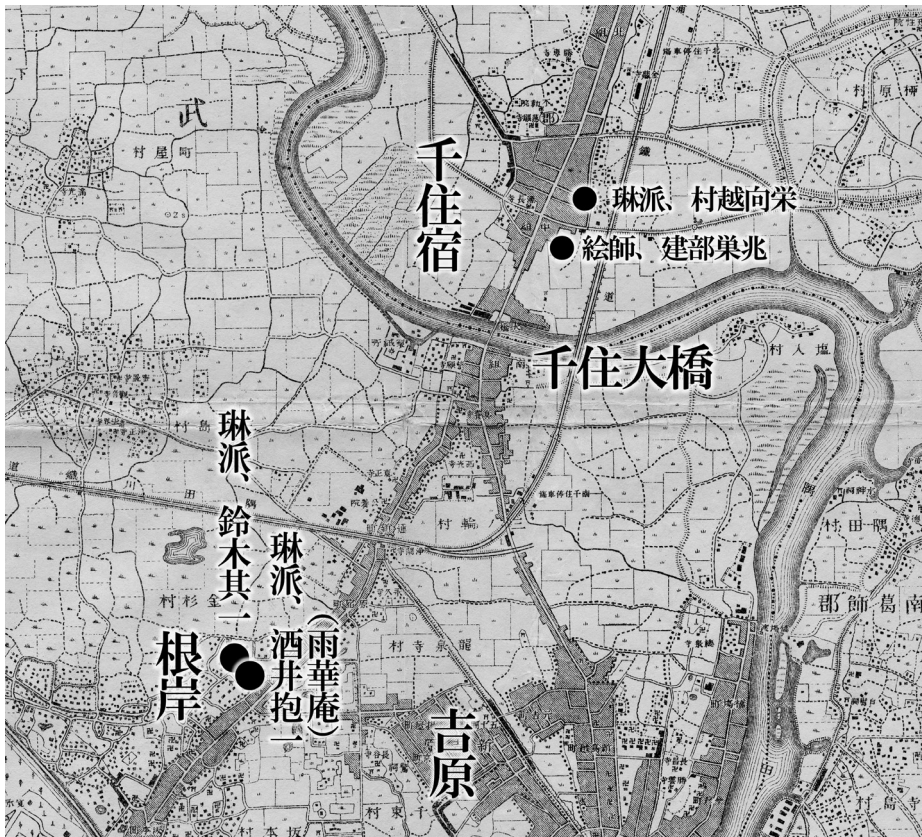
門人として知られるのが抱一に次いで琳派の大家として知られる鈴木其一(すずきいち)で、家は抱一の住居(後述)の隣にありました。

抱一が足立と深くかわるようになったのは、同い年の文人絵師で俳諧師だった建部巢兆(たけべそうちょう。別稿予定)と交流するようになったことが大きいと考えられます。抱一が巢兆没後に記した追悼文中では巢兆を「友」とよんでいます(巢兆没後発行句集「曾波可理」早稲田大学図書館蔵)。

■千住と雨華庵 さて、抱一と巢兆の交流は、地理的な要因も無視できません。抱一は江戸市中で幾度か転居しましたが、最も中心となったのは下谷根岸の雨華庵(うげあん)でした。現在の台東区根岸五丁目十一



酒井抱一像 野村文紹「肖像」(部分) 国立国会図書館デジタルコレクションより



千住宿と根岸 関係地図 明治13(1880)年測量、明治30(1897)年修正版の「下谷区」(二万分一、当館蔵)

番の一角です。いまでは金杉通りの北側の住宅街に位置しています。いつぼう巢兆の庵は、いくつか説がありますが、墨堤通りの南側、現在の千住河原町二九番付近であろうと考えられます(郷土史家・福島憲太郎氏による)。

抱一の雨華庵と巢兆の庵は、直線距離で二・三km、江戸時代の道を考えても二・五km程度です。徒歩で三

〇〇分ほどの距離で、徒歩中心の江戸時代では遠くはありません。抱一は下谷組という文人たちと深く交流していました。先の鈴木其一のほか、谷文晁、書家の亀田鵬斎、市河米庵らが、その代表です。巢兆は千住河原町の文人絵師、坂川屋鯉隠(さかがわやいん)をはじめとする俳諧の連、千住連を率いていました。この二人の出会いはずれぞれ

の集団の交流につながり、その後、明治期を迎えても続き、長く美術と文化を支えることになりました。とくに鈴木其一の門人だった村越其栄(むらこしきえい)は、下谷根岸に暮らしていましたが、天保十一(一八四〇)年に千住に移住し、子の向栄とともに千住の琳派として知られるようになりました。

## (2) 京出身の絵師 中村芳中

もう一人、足立と抱一のかかわりで紹介すべき人物が中村芳中(なかもろほうちゆう?一八一九)です。京都の人で京大坂を中心に活躍していた絵師の一人です。

寛政十一(一七九九)年に江戸へ下向しましたが、その頃、芳中とかわりを持ったのが建部巢兆でした。

### ■徳万歳 翌年の寛政十二(一八〇〇)年に巢兆は酒屋の主人といわれる千住連の燕市(えんいち)の選による「徳万歳」(とくまんざい)という句集を出版します。この句集に挿絵を描いたのが芳中でした(『日本俳書大系 十三』昭和二・一九二七年、日本俳書大系刊行会)。句集に挿絵を描くのですから芳中と巢兆の関係は浅からぬものがあつたと考えられます。

「徳万歳」にはもう一人、千住の

人物が関係しています。跋文を記した一啓齋路川(いつけいさいろせん)です。駿河国鞠子(現静岡市静岡区)の人で千住宿に住み、家塾教師として書や句読を教えて暮らした人物です。門弟たちが建立した、「一啓齋路川句碑」は千住仲町の源長寺にあります。足立区の登録有形文化財となっています。

■溜屋甚兵衛とは 研究が進んでいる一方で、あらたな謎も生まれています。「徳万歳」で俳句を撰じた燕市は実名が「溜屋甚兵衛」であることが判っています。しかし、この人物が実際に千住の町人・商人としてどこに住んでいたのか、また、現在、家が存続しているのか定かではありません。千住四丁目には、溜屋(たまりや)近藤商店があり、一度お尋ねしたことがあります。残念ながら十八世紀末の甚兵衛については不明とのことでした。

### (地域文化課文化遺産調査担当係)

#### 「足立史談」を郵送します

郵送用の封筒に、お送り先をご記入のうえ、84円切手を貼付し、郷土博物館にお送り下さい。○月号史談送付希望」とお書き添え下さい。郷土博物館のホームページからもダウンロードできます。

<https://www.city.adachi.tokyo.jp/hakubutsukan/goods.html>